

韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究

——ベトナムの非公定記憶を記憶する韓国 NGO——

伊藤正子*

Comparative Research on Memories Concerning Korean Armed Forces in Vietnam: Korean NGO Recovery of “Non-Official Memory”

Ito Masako*

Abstract

This paper aims to examine how reconciliation is developed through apologies towards damages by war, comparing the actions of nation-state, damaged areas and NGOs concerning the Vietnam War. The second aim is to consider official and non-official memories about Vietnam War both in the damaged country and the country that caused damages, further investigating the relationship between a variety of memories and political systems.

During the Vietnam War, South Korea sent the second largest group of armed forces, but recently the Korean's memories as heroic stories have been confused since Han-kyoreh magazine reported that Korean troops conducted mass killings.

After 30 years, an ex-service Korean's group visited the Ha My hamlet, Quang Nam Province, where slaughters occurred in 1968. They built a monument for the victims. But when it was completed, the group felt shocked about a poem on the massacre on the monument. After going back to Korea, they demanded revisions. The Vietnamese government, which was asked for revisions by the Korean Embassy, put pressure on the villagers, who finally covered the inscription.

Vietnamese policy is to seal the past and look to the future as at present, the most important issue for the government is to procure development funds from other countries, and to maintain the legitimacy of the Communist Party through economic development. Therefore, the memories of the Ha My, whose villagers did not necessarily contribute to the Revolution, could not become an official memory. Further, those memories are not connected with nationalism. This point is the most different when comparing with the case between Korea or China and Japan.

After the report by the Han-kyoreh, one Korean NGO started volunteer activities for Vietnamese

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科；Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
e-mail: itomasak@asafas.kyoto-u.ac.jp

survivors. Through those activities, some survivors have been healed, and for the sake of the Korean NGO, the memory of Ha My, which can never become official memory, is preserved in Vietnam.

Keywords: Vietnam War, Korean troops, Quang Nam Province, Han-kyoreh, memorial tower, memories of war

キーワード：ベトナム戦争，韓国軍，クアンナム省，ハンギョレ，慰霊碑，戦争の記憶

I はじめに

日本ではベトナム戦争反対運動を推し進めた当時の学生たちの世代が引退する時代を迎え、ベトナム戦争は過去の歴史として語られることが増えてきた。しかし、当事者であったベトナムにおいては、ベトナム戦争後に生まれた世代が人口の7割を占めるようになったとは言え、ベトナム戦争（ベトナムでは抗米戦争と呼称）に勝利したことは現在の政権の正当性の根源であり、苦しい戦いを戦い抜いて輝かしい勝利を手にした過程こそが、現在のベトナムの公定記憶となっている。また米国に次ぎ多くの兵士を派遣した韓国においては、ここ10年ほどの間に、派遣されていた韓国軍が多くの人間人虐殺事件を起こしていたことが報道されて、英雄物語として語られてきたベトナム戦争をめぐる記憶に大きな混乱が起こった。

韓国軍のベトナム派兵に関する研究は、韓国では軍事政権による支配が終わった1990年代に幾つか出されるようになった。それ以前には軍による『派越韓国軍戦史』などがあるのみだったが、これら1990年代以降の研究によって、派兵の過程や動機、背景が詳細に明らかにされるようになった。日本語で出版されたもの、あるいは日本語に訳されているもの、韓国人研究者がベトナム語で執筆したものもあり、本報告も派兵の政治的背景や過程に関してはこれらの先行研究に全面的に依拠している。¹⁾

本稿は韓国軍の行為そのものを逐一追うことを目的とするのではなく、ベトナム、韓国で収集した文献資料とインタビューを交えて、特に虐殺を経験したハミ村を例に、以下二点を明らかにすることをめざす。一つは、ベトナム戦争をめぐる国家レベルの対応と戦争被害地の対応、またNGOの活動を対比させながら、戦争被害に対する謝罪と、和解の進展のあり方をさぐることである。いまだ周辺国と植民地支配と戦争をめぐるって和解を成し遂げることが出来ずに来ている日本自身のあり方を見つめなおす契機にもしたい。二つ目は、被害国と加害国における戦争をめぐる公定記憶と、公定記憶にならない記憶の交錯や、記憶のあり方の多様性と国家体制との関係について検討する。²⁾

1) 朴根好 [1993], 朴洪英 [1998], Ku Su Jeong [2000; 2002], 韓 [2005], 金榮鎬 [2005] など。

2) 本稿で述べるように、ベトナム側は現在国家レベルにおいては、韓国軍のベトナム戦争派兵について問題化するつもりは全くないので、この問題に関するベトナム語文献はほとんど公開されていないこ

II 韓国軍のベトナム派兵のあらまし

韓国のベトナム派兵は、1964年のトンキン湾事件、65年2月の北爆開始、同年3月の米軍のダナン上陸など、ベトナム戦争がエスカレートしていった時期に重なっている。まず64年8月に非戦闘部隊である医療班130人とテコンドーの教官10人が派遣されたのを皮切りに、第2段階として翌65年2月に軍事援助団指揮処、陸軍に属する野戦工兵1大隊、野戦工兵修理保持班、防備大隊、運搬中隊など、つまりは工兵部隊を中心に計2,000人が派遣された [Ku Su Jeong 2000: 64-66]。そして戦闘部隊を本格的に送ることになるのは、1965年10月からである。4,480人の旅団（青龍旅団）と13,830人を含む陸軍1師団（猛虎師団）、軍支援司令部の計18,500人強がベトナムに派兵された [ibid.: 69-72]。

米軍総司令部のウェストモーランド将軍は、65年7月には275,000人、66年6月には545,000人の米軍の増強を要求したが、65年末の段階で米軍の総数は154,000人しかおらず、446,000人が足りないことになっていた。そこで韓国の戦闘部隊を投入することを計画した。これが第3段階にあたる。当時、65年10月22日にクイニョンに入った猛虎師団が、11月から12月にかけてビンディン省で作戦を行い、「勇敢な」精神を証明しており、米国は韓国軍がベトナム南部の戦場に最もふさわしいと考えるようになっていた [ibid.: 74]。

そして第4段階の派兵は大規模に行われ、1966年4月から10月にかけてクイニョンの猛虎師団に補充がなされ、ニャチャンに白馬師団が派遣されて、韓国軍の兵力は45,000人に達した [ibid.: 80-81]。67-72年までベトナム南部に駐屯した兵士数は50,000人に及び、韓国軍が派兵していた8年5カ月間の累計は、325,517人に及ぶ [ibid.: 1]。

先行研究が明らかにしたところによると、当初ベトナム戦争派兵を積極的に米国に働きかけたのは韓国政府側であった。その狙いは、経済的実利にあったと言う。朴根好によれば、「アメリカの韓国に対する軍事援助・経済援助が減少傾向をたどり、朴正熙政権は政権の基盤を動揺させはじめていたため、アメリカを軍事支援することによって、『ベトナム特需』と『派兵の見返り』として援助などを獲得するという目的があったからである」としている。³⁾ これらは、韓国側の要求によって作成されたブラウン覚書（1966年3月）中に示された軍事援助と経済援助の項目から明らかである。韓国政府にとってベトナムは、戦場ではなく、市場であった [朴根好 1993: 15]。

ㄴ とをあらかじめ断っておきたい。省、県、社（行政村）によっては、それぞれの歴史をとりまとめる際に、韓国軍の虐殺事件についてふれた資料を有している場合も僅かにあるが、多くは内部資料である。

3) このように経済的利益という実利を表面に出し始めたのは、戦闘部隊の派遣の要請を受けてからで、それ以前に非戦闘部隊を派遣したときには「道徳的名分論」を政府は主張していたという [朴根好 1993: 15]。道徳的名分論とは、朝鮮戦争の時に援助を受けたことへの「恩返し」と「自由」世界の安寧秩序を守るという名分のことである。

しかし、米国から支払われた参戦兵士たちの給料は恐ろしく低く、フィリピンやタイ軍兵士たちの30-40%にしか過ぎなかったという。そして韓国にとって最も大きな対価は、5,000人の死者と10,000人の負傷者を出したことであり、枯葉剤被害者も20,000人に及んでいる〔韓2005: 45-46〕。⁴⁾

III 『ハンギョレ21』の報道と韓国国内の反応

ベトナム戦争中に起こった韓国軍の民間人虐殺の記事を『ハンギョレ21』という週刊誌に執筆したのは、ハンギョレの通信員であった具秀姪(ク・スジョン, Ku Su Jeong)である。韓国では1980年代に盛んだった学生たちの民主化運動⁵⁾が、1990年代に入るとソ連の崩壊や、金大中(キム・デジュン)が1991年の大統領選に敗れたことなどで、方向性を失い低迷するようになった。学生運動の中心であった386世代⁶⁾は様々な方向を模索するようになるが、ク・スジョンは、ベトナムと韓国がようやく外交関係を樹立した1992年の翌年、1993年にベトナムに渡った。そして韓国軍が駐屯していた地域の周辺に、多くの「碑」があることに気づいた彼女は、1997年、韓国軍のベトナム派兵についてベトナム側の資料と証言をもとに明らかにするため、ホーチミン市国家大学で研究を始めた。1997年当時、地方はまだ外国人研究者の受け入れに必ずしも慣れていなかったが、ク・スジョンの熱意にうたれて協力するベトナム人は次第に増加した。彼女は、韓国軍が駐屯していたクアンガイ省、クアンナム省、ビンディン省、フーイエン省をまわり、省や県レベルでの文献資料収集のほか、村レベルで生き残りの人々から、民間人虐殺の様子を聞いてまわった。その成果を文章にしたものが、1999年のハンギョレ新聞社が発行している週刊誌、『ハンギョレ21』の掲載記事である。まず5月6日の256号に「ああ、震撼の韓国軍」というタイトルで掲載されたのを皮切りに、「ベトナムの冤魂を記憶せよ」「われわれの恥部に光を」などの見出しが並ぶ。

同時期韓国では、朝鮮戦争時の米軍による民間人虐殺事件である老斤里(ノグンリ)問題⁷⁾が発覚し、米軍の責任を問うなら、自分たちが起こしたベトナムでの民間人虐殺にも向き合わねばならないと考える人々も多く、『ハンギョレ21』には多くの賛同の反応が寄せられた。ハンギョレ新聞社が1999年10月から集めた寄付金は1億5,000万ウォン(約10万ドル)にのぼり、

4) 中村〔2005: 235-238〕にも、枯葉剤被害を受けた韓国兵に関する記述がある。

5) 民主化運動に参加した学生たちの間では、南ベトナム政権下で革命運動に加わり弾圧を受けた女子学生を描いた、グエン・バン・ボン〔1980〕の作品が、日本語から訳されて盛んに読まれていたと言う。

6) 韓国では、この言葉がつくられた1990年代後半に30歳代(3)で、1980年代(8)に大学に入学して民主化運動を担った1960年代(6)生まれの世代を、386世代と呼ぶ。386世代は、ノ・ムヒョン(盧武鉉)政権成立の原動力ともなった。

7) 日本語で読めるものとして、鄭〔2008〕がある。

その結果2003年1月フーイエン省に韓越平和公園が建設されるに至った。

しかし、一方「共産主義から国家を守るため、共産主義の浸透に悩むベトナムを助けるのだ」という当時のスローガンを信じて、ベトナムに送られ、命がけで戦った当時の旧兵士たちの間には反発がひろがった。『ハンギョレ21』のキャンペーンは、亡くなった戦友や自分たちの榮譽を冒瀆するものに映ったからである。「枯葉剤後遺症戦友会」のメンバー2,400人が迷彩服姿で、ハンギョレ新聞社を襲撃して占拠し破壊するという事件が2000年6月に起こった。しかし参戦兵士たちもちろん一枚岩ではなく、「ベトナム枯葉剤被害者戦友会」は、この事件を言論への暴力として非難した〔金榮鎬2005: 15〕。⁸⁾ 反共の観点から「自由」世界の安寧と平和のために派兵したというベトナム戦争派兵の当時の大義名分が、やはり誤りだったという評価をくだすことは、当の米国でベトナム戦争を「誤りだった」とする意見が出ている現在でも、北朝鮮との統一がまだなされていない韓国において、依然として難しい側面がある。この問題に関しては、21世紀に入っても、韓国世論はさまざまに分裂している。

この『ハンギョレ21』の報道は、当時の韓国政府にも大きな影響を与えた。金大中大統領は、2001年8月、ベトナムのチャン・ドゥック・ルオン国家主席が韓国を訪問したおりに、ベトナム派兵に対して「本意ではなくベトナム国民に苦痛を与えたことを申し訳なく思う」と述べた。金榮鎬はこの金大統領の「申し訳ない」発言を「謝罪」と呼べるかどうか、留保をつけている。それは、「金大統領の野党時代の発言に、ベトナム戦争時の加害認識が見られないので、加害の相手国からの要求ではなく、大統領のパーソナリティでもないのであれば、『謝罪』は民間の謝罪運動に要因があることになる」からだとしている〔金榮鎬2005: 15〕。

IV ハミ村の慰霊碑碑文をめぐる対立

IV章では、民間人虐殺が起こった一村を取り上げ、そこに韓国の戦友会が援助して建てた碑をめぐってもちあがったさらなる事件を紹介する。この事例から、国家が負の歴史を認識することの困難さを考えるとともに、被害国にもかわらず、一党独裁体制下、思想・言論の自由が十分に確保されていないため、多様な記憶の表明を許容せず、国家関係を優先するあまり結局は弱い立場の自国民を犠牲にするベトナム側の国家権力のあり方についても明らかにしたい。

IV-1 ハミ村での民間人虐殺事件

クアンナム省ディエンバン県ディエンズオン社ハミ村 (Quảng Nam, Điện Bàn, Điện Dương,

8) ベトナム戦争に参戦した兵士の中には、自ら戦争中の虐殺の体験を公にする人もわずかながら存在する。野田 [2001]、慶 [2000] など。

Ha My)⁹⁾ は、世界遺産の指定も受けた古い街ホイアンのすぐ北東に位置する農村である。このごく平凡なベトナム中部の村で、突然の虐殺事件が起こったのは、1968年2月24日（旧暦1月26日）だった。当時のことをよく知るグエン・コイ（1945年生、男性）、また虐殺の生き残りのファム・ティ・ホア（1927年生、女性）らによれば、事件の経緯は以下の通りである。

韓国軍は、ハミ村の南西、ホイアンのカムホアというところに青龍旅団が駐屯していた。韓国軍は軍事区をハミ村につくろうとしており、ハミ村の西ハミ集落以外の集落の人々は移住させられていた。しかし西ハミ集落は、漢字を書くことのできた集落の長老が集落に留まることを、韓国軍の指揮官に手紙を書いて願い出て認められたため、住民はそのまま残っていた。当初青龍旅団の兵士との関係は良好で、韓国軍兵士たちは米を分けてくれたり、子供たちにお菓子をくれたりしていた。情勢が安定しているのを見て、ハミ村の他の集落の住民で移住させられていた人たちが移住先を抜け出して、西ハミ集落にやってきており、人口が当初の80人から倍の160人程度にまで増加していたほどだった。

23歳の青年だったコイは、自宅にいと南ベトナム政権軍の兵士として連れて行かれるので、夜間だけ自宅に戻り、昼間は人目につかないように周辺に逃れていた。その日も、朝早くに既に家を離れていた。韓国軍がやってきたのは朝7時頃で、村人が気づいた時には数百人が集落を取り囲んでいたという。殺気立った様子で、それまでの雰囲気とは異なり、皆別人のようになっていた。コイは後から考えてみると、前日に南ベトナム解放民族戦線の激しい攻勢があり、恐らくその戦いで仲間が多数亡くなったため、韓国兵は復讐心に燃えていたのではないかと思うという。

村人たちは恐怖を感じて計4カ所に自主的に集まった。その後隠れていたところを韓国兵にみつかったり、韓国兵に追い立てられて集められた人もいた。4カ所とは以下のとおりである。1-3は西ハミ集落、4はドンチェ集落である。

1. レ・ティ・ト宅（トは証言者コイの母）、集まっていた人12人
2. グエン・ビン宅、約50人
3. グエン・ディエウ宅、40人
4. ズオンおばあさん宅、約10人

1の地点では、大砲を避けて防空壕に入っていたが、韓国兵がM79を連射し、手榴弾を投げたため、9人が亡くなった。コイの当時10歳の妹と8歳の従兄弟はケガをしたが生き残った。コイの7歳の弟もまだ息があったが、二日後にダナン港に停泊していたドイツ赤十字の病院で亡くなった。

9) ベトナムの行政区分は、上部組織から省、県、社（行政村）、集落となる。省はほぼ日本の県に、県は日本の郡に相当する規模と考えてよい。ディエンバン県は県内の虐殺被害について、パンフレット *Huyện Điện Bàn* [1995] を作成している。参考文献参照。

2の地点、ビン宅は藁葺き屋根で壁のある家であったが、韓国兵は約50人を家に入れ、M79銃を連射し、手榴弾を投げた。ビンは祖先の祭壇のうしろのレンガづくりの開きに隠れていて殺されずにすんだ。ホアは大ケガをしたが、韓国兵が家に火をつけていった後引き上げると、這って外に出て助かった。もう一人チュオン・ティ・トゥもケガをしたが生き残った。またビン宅の嫁であるグエン・タイン・ナムと、ビンの孫で5歳くらいだったグエン・ティ・リエウは、ビンと一緒に隠れていて助かった。

3番目の地点、ディエウの家では庭でほぼ全員が全滅していた。当時1歳とちょっとで、母親のお乳を吸っていたグエン・ティ・サンと、3歳だったグエン・ティ・ボンだけが生き残った。ボンは撃たれて顎が無くなっていたが、のどが渴いて、水の入った瓶を探して這っていった。その後、ダナン港に停泊していたドイツの病院に連れて行かれた（現在米国にいる）。また当時8歳のブイ・ティ・マイもケガをし、家族全員がその時殺された。現在は農民をしている。

4番目の地点、ズオン宅では全員が亡くなった。

コイは夜になって帰宅して、自分の家で母や叔母をはじめ家族が殺されているのを発見した。ディエンゴック村の人たちを呼んで生き残っていた者たちを病院に連れて行ってもらったが、韓国兵に撃たれるので明かりをつけることができず、暗闇の中で死体を集めて埋めた。しかし次の日、韓国軍は戦車を持ち出してコイ宅を壊し、暗かったためきちんと埋めることができていなかった死体を戦車で轢いて整地していった。「二度殺された」とコイは語った。

IV-2 慰霊碑の建立

このハミ村を、当時の青龍旅団に属していた軍人たちが、ベトナムと韓国の関係が改善した後再訪し、自分たちで集めた寄付金で立派な慰霊碑を建立したが、慰霊碑に彫られた詩の内容をめぐる紛糾、韓国外務省を通じて慰霊碑の内容を書き換えるよう圧力をかけることになった問題を取り上げる。これに対しベトナム側は、国家レベル、省レベル、村レベルで当初バラバラの対応をした。

ベトナムでは、ベトナム戦争終了後ドイモイ開始前の時期に、虐殺があった村のうち幾つかに「憎悪碑」が建てられていた。しかし、資金面の問題などで、碑を建てることができない村も多かった。そのような状況を聞いて、上記のハミ村を訪れた当時の青龍旅団の軍人グループは、ハミ村に慰霊碑を建てるための資金を援助することにした。4万米ドルの寄付で碑の建設が始まったのは、2001年のことであった。

ハミ村の属するディエンズオン社は、慰霊碑と集団墓地の建設のための土地を提供し、村人たちは労働力を提供した。昼休みは通常昼寝をして過ごす習慣のベトナム人たちが、この慰霊碑建設作業のためには昼寝もせず嬉々として自主的に働いていたという。

できあがった碑の表には犠牲になった人たちの名簿が、裏側には虐殺を詠んだ詩が彫られた。地元では詩才があるとして知られ、同じディエンバン県内ディエンナム社の出身で、地元紙のクアンナム新聞のグエン・ヒュー・ドーン記者に、村が創作を依頼した詩であった。村人たちによると、グッと胸に詰まるような、あるいは鳥肌がたつような気持ちになるということで、当時の様子も、また村人たちの気持ちもとてもよく表現できた感動的な出来栄であったと言う。詩はディエンバン県で検閲を済ませたものでもあった。

敷地は集団虐殺で多くの人が殺された地点の一つであり、霊が出るとのうわさもあって誰も住み着くことなく空き地になっており、犠牲者のうち幾人かの墓があった場所であった。またこの地とは別に墓をつくっていた村人たちもいたが、多くの人が、慰霊碑ができて、その前庭部分に整地された集団墓地に、家族や親戚の遺骨を埋葬しなおした。集団墓地に墓を移動させるとごく少額の援助がもらえたが、多くの人が墓を移動させたのは、その少額援助のためではなく、慰霊碑と集団墓地が非常に立派に出来上がったために、そこに遺骨を移す気になったからである。

IV-3 碑文の内容

グエン・ヒュー・ドーン記者が書いた詩の訳文をここで紹介する。多少長くなるが、韓国政府が何を承服できなかったのか、理解するためである。¹⁰⁾

歴史書の記録によれば、海と川が混じり合うディエンズオンに、貉龍・鴻雁 [ベトナム人の先祖とされている伝説上の人物たち] の子孫がホアインソン山脈 [Hoanh Son] を越えて南へ南へと開墾して、いまから五百年前、国家の記憶をつくった。人びとはハミに村をつくり、田畑を耕し、漁を捕り、野菜を育てて平和に暮らしていた。天は平穏で地が穏やかな時までは。

しかし、暗雲が立ちこめ、雷が鳴り、かれらがやってきた。かれらは土地を荒廃させ、波風を立て、住民を戦略村に追いやり、村を、故郷を棄てるほかにささせた。かれらは私たちに断腸の苦痛をもたらした。住民は土地と川と海を失い、田畑を耕し魚を捕まえる生業まですべて失った。その悪徳さを言い尽くせるだろうか。頭が地面に転がり、血が川のように流れ、あたかも乾ききった髪の毛がばらばらと抜けるように、椰子の葉が枯れ、荒廃していった。涙が池をなし、一瞬で砂原が灰となり、ハザー [Ha Gia] の森は枯木だけ

10) 筆者はドーン記者からベトナム語の詩の現物を入手したが、最終稿ではないとのことであった。一方、キム・ヒョナ（金賢娥）の著作内に出てくる詩は、韓国語に訳されたものであるが、彼女がまだ実際の碑文が存在していた時に、その訳を手に入れたものであるため、本稿では、彼女の著作を元に記載している。

になった。ケーロン [Khe Long] の船着き場には死体が積み重なった。

1968年の早春、陰暦1月26日、青龍部隊の兵士が狂ったようにやってきて人々を虐殺した。ハミ村35家族のうち135名を殺した。ここは血に染まり、砂と骨とが入り交じり、家は焼かれ、火に焼かれた死体がからみあい、焼けた死体をアリがかじり、血のにおいが満ち満ちていた。爆風が吹き抜けると、さらに悲惨だった。

破壊された家では年老いた母や父が呻きながら死に、子供たちは恐怖におびえた。逃げた人は銃撃されて死亡、子供は死んだ母親のもとに這って行きお乳を吸った。もっとひどいのは、戦車で遺体を踏み潰したことだ。暗闇がこの地を覆った。草が枯れ、骨も枯れた。魂は眠れずにあちらこちらとさまよい、憤怒は青天にまで達した。

しかし天は暗くともいずれば晴れる。

わが故郷がふたたび平安につつまれ幸福になって25年。

ディエンズオンの地にもサトウキビが育ち、稲が青々と実り収穫され、海と川では魚もエビも豊富に獲れる。共産党が道を作り、荒涼とした平原を開拓していった。過去の戦場はすでに苦痛が和らぎ、韓国人がここを再訪し、恨めしい過去を認め、謝罪した。そして赦しのうえに、この碑石を建てたのである。

私たちは人道的な仁義によって故郷の発展と協力をとげることになるだろう。

この砂浜とポプラの木が、虐殺を記憶するであろう。

党地区政権とディエンズオンの住民、これを捧げる。

庚辰年（2000年）秋8月

[金賢娥 2009: 282-284]

碑文内容は、生き残りの人々の話をかなり忠実に再現しており、また最後は未来志向で締めくくられている。「過去にフタをし、未来へ向かおう」（後述）というベトナム政府のスローガンの後半部分「未来へ向かおう」には少なくとも従っていた。

IV-4 碑文をめぐる韓国側の圧力

しかし、出来上がった碑を見に来た青龍旅団の元軍人たちは、自分たちが謝罪のつもりで建てた碑に、残虐行為がリアルに表現されていることに耐えられず、この詩の内容について一部の語彙を変更し、また部分的に削除するよう要求するに至った。ディエンバン県副主席によれば、韓国の戦友会は韓国政府に対してこの修正をベトナム政府に申し入れるよう要求し、韓国外務省はベトナム政府に圧力をかけた。その韓国政府の要求は、碑の語句の修正と一部の削除に応じなければ、碑建設費は援助しないというものであった。

このベトナム側の証言が指すものかどうか明らかでないが、ハノイの韓国大使館は、確かに

ベトナム側に圧力をかけている。当時大使館員であったイ・ヨンジュンが『ベトナム、忘れられた戦争の傷跡を探して』と題する本を2003年に出版しているのが、ハミ村の慰霊碑騒動について、韓国政府側の一員である彼がどう行動したのか、以下同書の記述に基づき再現したい。イは、韓国政府がクアンナム省に建設を援助する学校¹¹⁾の敷地について調べるために、2000年12月事前調査に出かけた。同21日、一番初めに訪問したのが、ハミ村のあるディエンズオン社であった。「民間人虐殺があり、135名死亡したということは、韓国内の言論から知っていた」[이용준 2003: 96]と言う。

まず、ディエンズオン社の学校に到着すると、社のゲン・ヴァン・ハイ人民委員会主席(村長に相当)が出迎えてくれ、測量などが終わった後、「ある韓国在郷軍人団体の資金援助で最近新しく建てられた慰霊碑が近くにあるから、見に行きませんか」と誘われた。イにとっては初めて聞く話であった [ibid.: 99]。

慰霊碑の碑文を大使館の通訳に訳してもらおうと思ったが、「叙事詩のような古い文体で翻訳できない」と言った。英語がよくできる教育部の職員に頼んでも、最初の部分をちょっと訳しただけで、あとは難しいと放棄した。しかし、写真を撮って帰って、韓国人の通訳に訳してもらったら、簡単に訳せた。内容からして、翻訳できなかったのではなく、しなかったのだろう [ibid.: 99]。

イはこの碑文の内容に衝撃を受けた。ベトナム政府は「過去にフタをし、未来へ向かおう」という方針(後述)を掲げているが、韓国政府もベトナム政府のこの方針に完全に賛同している。そのため、碑文の内容は韓国大使館員のイにとっては、両政府の方針に真っ向から対立するものに思えたのである。

翌2001年1月初め、イは新年の挨拶を兼ねて、ハノイの共産党対外委員会と教育科学委員会、外交部、公安部、教育部などを訪問して、学校建設のための中部地方における調査結果を説明した。その過程で彼はディエンズオン社の慰霊碑の話を、ベトナム政府の役人たちにした。

ハノイの役人たちの反応は予想より深刻だった。中央ではそうした慰霊碑の存在自体を全く知らずにいたと言い、党と政府が韓国と未来のための協力を強調している時に、いったい誰がそのような慰霊碑を新しく建てたのか、というのだった。

かれらは、私に、慰霊碑の文言をどう思うかと聞いた。私は過去の怨恨を長く刻もうという文言の趣旨が、過去の問題に関するベトナム共産党と政府の政策に合わないと思う、と答

11) 韓国は、クアンナム省とクアンガイ省に計20の学校建設を援助した [이용준 2003: 157]。

えた。かれらも私に同意した。かれらは現地の人民委員会を通じて背景を調査したあと、必ず必要な措置をとる、と述べた。

私もその、恨みに固まった文言は必ず修正されなければならないと思った。歴史は歴史として長く伝えられる必要があるかもしれないが、ベトナム人の韓国への憎悪心を後代に受け継がせることは、双方にとって益にならないので、どうしても防がねばならないという思いであった。

その後、中央では、クアンナム省に慰霊碑の文言を修正せよという指示を下し、また、在郷軍人会¹²⁾ 本部は、クアンナム省在郷軍人会会長が直接ディエンズオン社を訪問して住民を説得する予定であると知らせてきた [ibid.: 111-112]。

イの記述からは、彼が韓国大使館の意向をふまえたうえで、ハノイの役人たちに碑文の話を持ち出したのかどうかは確認できないが、ベトナム政府が「韓国政府が碑文の文言の訂正を強力に求めている」ものとして、発言を「圧力」と受け取ったのは確実である。

IV-5 クアンナム省の屈服

ベトナム政府は、韓国政府の申し入れを受けて、今度はクアンナム省に圧力をかけた。「過去にフタをし、未来へ向かおう (khép lại quá khứ, hướng tới tương lai)」というスローガンを掲げるベトナム政府は、歴史上、ベトナムに被害を及ぼしたいかなる国に対しても賠償を求めることをせず、未来の関係改善こそを重視するという方針をとっている。このスローガンは、当初は米国との関係改善を目指して、1990年代前半に掲げられた方針であったとされる。ベトナムは歴史的には、19世紀以降、フランス、日本、アメリカ(韓国など)、中国(中越戦争時)と戦ったが、ドイモイ開始後、ベトナムの共産党や政府側から戦争被害の賠償要求を持ち出したことは一切ない。賠償要求どころか、要人同士が会う際にも、過去の戦争被害につれて、ベトナム側からはふれることさえ避けている。ベトナム政府は「過去にフタをし」ないクアンナム省を、方針に従わせようとしたのだった。¹³⁾ クアンナム省は当初、当時の省人民委員会副主

12) ベトナムでは「旧戦士会」が正式名称である。

13) 金榮鎬によれば、『ハンギョレ 21』による韓国軍のベトナム民間人虐殺の掘り起こしに対しては、駐越韓国大使館だけでなく、ベトナム外務省も困惑していたと言う。この件を取材しようとしたロイター通信の記者は、ベトナム政府から現地の当事者の取材を許可されなかった。ベトナム政府は非公式に報道自制方針をマスコミに下したと言われる。ロイターの記者は、「この問題にこれ以上執着するのを望まない」とベトナム外務省に言われた。しかし後にベトナム外務省スポークスマンは、「ベトナム戦争の傷を治療するために韓国が行った活動と物質的援助に感謝する」という声明を発表したり、駐韓ベトナム大使は、『ハンギョレ 21』の編集部に感謝状を送っている。また、グエン・ジ・ニエン外相は、ク・スジョンに親書を送り、ベトナム政府は過去を閉じようとする主張ではいるが、戦争の後遺症の克服に協力することは道義的にふさわしく、韓国の市民団体の活動を尊敬し、感謝すると述べたと言う [金榮鎬 2005: 14]。

席，ホー・ティ・タイン・ラム（女性，日本では副県知事にあたる）が，「それなら韓国から援助してもらわなくても結構，慰霊碑の建設費は，クアンナム省とディエンバン県で援助する」と，ベトナム政府の要求を突っぱねた。

当時，韓国からの投資は民間からだけではなく，KOICA¹⁴⁾ などを通じた政府レベルの援助も増大しており，クアンナム省では特に複数の病院の建設を計画，施工中であった。特に2001年には，省南部のヌイタイン県に省の中央総合病院の建設計画が進んでいた。韓国政府が暗にこの中央総合病院の建設中止をおおわせたかどうかは不明であるが，ディエンバン県によれば，ベトナム政府は，この援助が取り消されたらクアンナム省にとって大きな損失になると省を説得したと言う。

一方，2001年2月，再びクアンナム省とクアンガイ省の学校敷地調査に出かけた韓国大使館のイ・ヨンジュンは，その時の状況を以下のように記している。同行したのは以下のメンバーらであった。KOICAハノイ事務所所長，KOICA本部部長，韓国側設計事務所の部長，ポスコ開発¹⁵⁾のベトナム現地法人の課長，その他ベトナム教育部の職員3人，大使館通訳である [イ・ヨンジュン 2003: 114]。イによれば，2月20日，ダナンを発ってクアンナム省に到着し，同省の旧戦士会会長を訪問した後，ラム人民委員会副主席と会った。かれらはイが尋ねもしないのに，ディエンズオン社の慰霊碑の文言について話し始めたと言う。

かれらは自分たちもそのような慰霊碑があることは全く知らず，文言の内容がベトナム政府の政策と合致していないという点を認めると述べた。ただ，ベトナムの政治体制上，文言を変更するには，住民の同意が必要なのでもう少し時間が必要だとの説明があった。口ぶりからすると，かれらは中央政府から相当な圧力を受けているようだった。

（中略）敷地調査で2月22日木曜日にディエンズオン社を再訪した時，ハーイ主席は旧知ということでとてもうれしそうにわたしたちを出迎えた。慰霊碑の文言についての協議を要請すると，かれは自分にはそのような権限はなく，その問題を協議するなら，クアンナム省の人民委員会の事前許可が必要だと言った。事情がそうならば，現地の住民と直接対話をしようと言い，推薦を求めたが，かれはやはり事前許可が必要だと言った。

（中略）ハーイ主席はクアンナム省人民委員会の指示に従って自分のところの住民を説得しているが，住民が文言の修正に反対しており，自分も苦しい立場にあると言った。わたしは，反対する住民を昼御飯に招待しようと提案したが，ハーイは，かれらはほとんど拒否するだろう，と言ってやめさせた [ibid.: 118-120]。

14) KOICA (Korea International Cooperation Agency) は，JICAの韓国版で，韓国政府のODA援助を実施する機関である。

15) ポスコは韓国最大の製鉄会社。

韓国政府をバックにした大使館の面々と KOICA の有力者たちが大挙してやってきたのであるから、権威も資金もあるかれらに圧倒されて、クアンナム省もディエンズオン社も、幹部は屈服せざるを得なかったであろう。ベトナム政府からの圧力を当初はねつけたという省のラム副主席が妥協的発言をし、社のハイ主席も板挟みの苦しい心情を吐露している。さらに、2001年4月には、韓国のテレビ取材班とともに、イは三度目のクアンナム省訪問をしている。取材後ディエンズオン社のハイ主席から昼食に招待された。昼食には社の主な幹部らが30人ほど出席した。

私は立ち上がり、参席したすべての住民に、単刀直入に述べた。「私たちはみなさんの友人です。ところが、この村の慰霊碑は友人である韓国人への憎悪心を長く忘れずに記憶せよ、と教えている。友人への憎悪心を子孫にまで伝えて何をどうしようというのか。過去の事件を否定するのではない。しかし、私たちの中でこれ以上の憎悪心はよくない。このなかで、まだ韓国人への憎悪心を残している人がいるならば、この場で私たちに鬱憤晴らしをしなさい。そして過去を忘れなさい」。

ハイ主席は村人は誰も韓国人に憎悪心を持っていないと言った。慰霊碑の文言修正問題も自分はもちろん、この場に参席した有志たちみなが賛成しているのだが、まだ反対している人がいる、と言った。何人が反対なのかときいたところ、三人だという。三人、三人だって！あきれてしまう。

私は、かれらがそんなに力のある者なのかときいた。ハイはその三人が問題の虐殺事件のときに生き残った生存者なので、かれらの意見が最も重要なのだと言った。二人は当時生まれたばかりだったので、母親が抱いていて代わりに撃たれたおかげで生き残り、もう一人はクビが半分ほど切られ、ベトナムでは治療が不可能なので当時西ドイツ政府の配慮で、ドイツに飛行機で運ばれ、治療を受けて生き残ったと言う。¹⁶⁾

周りは肅然とした。私もしばらく呆然として涙が流れた。阿鼻叫喚の場面が頭をよぎった。私が今までかれらに対して何を求めてきたのかを考えると、恥ずかしくなった。私はしばらくして立ち上がり、住民にこう言った。

「反対する人がかれらであれば、説得する必要はない。わたしたちはかれらに再び苦痛を与えたくない。慰霊碑の問題はなかったことにして、忘れることにする」[*ibid.*: 151-152]。

イはこの場では韓国という国家を代表する者であり、一方集まっているベトナム人たちも実

16) ディエンズオン社では、亡くなった者については慰霊碑に記入するため厳密な調査をしているが、生き残った者については、社で事件を記録する資料などを作成していないため、証言者によって多少ばらつきがある。生き残った者の数や状況については、筆者の聞き取りと若干のずれがある。

際に虐殺の被害を生き延びた人々ではなく、共産党政権下での村の有力者である国家幹部たちである。本当の被害者は排除された場で、両国家の「友好・親善」を掲げる者たちどうしの話し合いが進んでいった。

IV-6 碑文をめぐるディエンズオン社の住民の対応

ハミ村の人々は、圧力を受けた当初、真実が書かれているだけなのになぜ消さなければならぬのだと言い合い、「そのようなことをするのは悲しすぎる」と言って、しばらく上からの要求を無視していた。「絶対消すものか」という人もいたと言う。地元の反発に驚いたベトナム外務省は、クアンナム省を説得したうえ、県レベルを飛び越え、省の外交局のスタッフをディエンズオン社まで向かわせて説得にあたらせた。¹⁷⁾

イ・ヨンジュンは村人たちがこのような結論に至った状況を以下のように記している。

そんなある日、思いもよらない朗報が飛び込んできた。文言を修正せず、なんとすべて削除することに最終合意したというのだ。まったく予想外の結論であった。文言を全て削除したら、私たちとしてはこれ以上望むことはないことだが、文言修正に反対した人たちがどうやって完全に削除という極端な結論を下したのだろうか。背景を知ってみると、ハイイ主席が最後の手段を使ったのだ。かれは「虐殺」という単語を取った穏健な文言を受け入れるのか、そうでなければすべての文言を削除するのか、という二者択一をせよと住人に要求し、その結果、すべてを削除するという法案が採択されたのである。その理由は「歴史を歪曲して記録するよりは、むしろ記録しない方がよい」という主張が圧倒的な優勢を占めたためだと言う。一発殴られたような気分だった。田舎の人から奥深く骨があることばを聞くとは想像もできなかった。(中略) これで、六カ月にわたった慰霊碑問題は幕を降ろしたが、私としては「歴史を歪曲するよりは消してしまおう」というディエンズオンの住人に、後々まで申し訳なく罪深いことをしたという思いを禁じえなかった [이용준 2003: 154-156]。

ハミ村の人々は、実は削除してしまったわけではなかった。修正するくらいなら「フタをする」と言って、蓮の絵柄を彫った石版で、碑の裏面を覆い、本当にフタをしてしまったのである。地元のベトナム人たちは、「これこそまさに過去にフタをする、ということだ」と、冗談交じりに、また自嘲めかして言っている。しかし、この冗談には、「決して過去を忘れ去るということではない」という村人たちの強い決意もこめられている。筆者の調査時（2009年）に

17) ディエンバン県副主席によれば、韓国外務省もベトナムの末端の地元の人々の強い態度に驚き、ディエンズオン社の幹部9人と、ディエンバン県の人民委員会主席を韓国に招待したという。時期は不明。

は「フタをはずせばまた読める」と言った村の幹部もいた。

このような経緯を経て、落成式は2002年になってやっと行われた。しかし、慰霊碑と集団墓地の入り口の門扉に取り付けられていた、韓国の戦友会が援助をしたことを示すプレートはいつの間にか誰かにはずされてしまっている。

V ナワウリの活動とハミ村の生き残りの人々

一方、NGO活動が盛んな韓国では、1990年代の後半にベトナム戦争中の韓国軍の民間人虐殺に関心を寄せるようになった団体が現れた。1998年に設立された「わたしとわたしたち」を意味する「ナワウリ (NAWAURI)」である。ナワウリのメンバーは、同年3月に出発する、日本のNGO「ピースボート」が主催する船旅「春風アジアクルーズ」に誘われた。ピースボートは1982年に起こった日本の教科書問題（「侵略」とすべきところを「進出」と表記した問題）を契機につくられ、早稲田大学の学生たちを中心に、「このような教科書では学ぶことのできない真の歴史を学ぶために、日本がアジアでどんなことをしたのか、現地に行って直接見、聞いてみよう」という趣旨で設立された。ピースボートは船中で、一緒に乗船している講師の講義を聞いたり、歴史や平和問題などについての討論を乗船者たちが行ったりしながら旅をし、現地に到着すると、現地調査をして被害者や生存者の話を聞き、現地の人々との対話を重ねており、ピースボートHPによれば、この1998年春の航海は22回目の航海で、454人が乗船していた。

ナワウリの初代表であったキム・ヒヨナによれば、ダナン港に着いた乗船者たちは、3つのプログラムに分かれて1日を過ごすことになっていた。その一つが「ベトナム戦争と韓国軍」というタイトルであり、韓国人の参加者の大部分と一部の日本人参加者がこのプログラムを選んだ。この時点では韓国人参加者たちは、どういう話を聞くことになるのかまったく知らなかった。そこで聞かされることになったのが、先のハミ村の人たちの話である。当時30歳代前半の韓国人参加者たちにとって、完全に初めて聞く話であり、当惑を引き起こすものであった。しかも、この問題を日本人に提起されたことは、韓国人参加者たちの苛立ちを倍増させるものであった。その後船内で行われた討論では、日本人側から「韓国は日本に謝罪し反省しろ」といいながら、ベトナムに対してはなぜ謝罪しないのか」といった問題提起があり、「日本に補償を要求するのに、ベトナムに対して何もしないのか」という質問が出されたりし、キム・ヒヨナによれば、「船のなかに異常な空気が流れた」という [金賢娥 2009: 42-44]。¹⁸⁾

しかしその後、ナワウリのメンバーは、自分たちの力でこの問題を明らかにするべきだと考

18) ク・スジョンによれば、怒りのあまり途中で下船した韓国人参加者もいたと言う。

え、自ら現地に行くことになる。ナワウリのメンバーたちは、ホーチミン市に留学してこの問題に少し早く注目し資料収集を開始していたク・スジョンと合流し、ク・スジョンが手に入れていたベトナム共産党政治局が編纂していた虐殺に関する内部資料をもとに、調査の旅に出る。この数週間の調査は断続的に計4回4年に及び、その参加者には、当時参戦した韓国兵士たちもいた。

ナワウリはこの調査の後、2003年から、韓国軍が駐屯して、虐殺事件を引き起こしたダナン周辺、クアンナム省、ビンディン省、フーイエン省を対象に、幾つかのプロジェクトや活動を始めた。一つは、韓国人青年とベトナム人青年（ホーチミン市の若者と村の若者たち）が一緒に労働して親睦を深めるものである。労働によってつくったのは、まずは慰霊碑で、その後舗装道路の建設や橋の建設、生き残りの高齢者たちの家の修理などであった。ベトナム人でも、ベトナム政府の「過去にフタをする」という方針のせいで、地元以外の青年世代はベトナム戦争の歴史についてあまりよく知らず、ましてや韓国軍の虐殺事件については知らない者が多い。そのため、ベトナム人自身がこの問題に関心をもち、家族を虐殺され苦しい思いをし、今もおきざりの状態にある¹⁹⁾生き残りの人々を自ら助ける必要があることを自覚してもらうことも狙っていた。

慰霊碑に関しては、ハミ村の教訓をもとに、地元の人たちと十分に話し合いを重ねた上で、建設を行った。同じく虐殺のあったディエンバン県のディエンアン社フォンニ村に建設した慰霊碑は、シンプルで豪華ではないが、ナワウリによる少額の援助に加え、地元が設計、土地の提供、周辺道路の整備などを行い、韓国とベトナムの両青年たちの労働によってできあがった。地元の人たちからは感謝されるものになっている。また2000年から東歯科医師団と協力し、「和解と平和のためのベトナム診療団」（現：ベトナム平和医療連帯）として、毎年韓国軍駐屯地域に送る運動を継続している。

これらの活動を通じて、憎悪の対象であった韓国のイメージは、虐殺被害者の人たちの間でも少しずつ変化している。もちろん、ベトナムにおける韓国人気は、アジアの他の国々と同様韓流ブームの影響が大きいですが、虐殺の生き残りの高齢者や中年以上の人々が少しずつ癒されてきているのは、これらの活動の効果が大きい。またク・スジョンが被害者の高齢者を何度も訪問して、韓国社会にこの問題を知らせ、今後の教訓にしようと奮闘する姿を目にすることで、韓国人に対する憎しみが薄れていったと感じているお年寄りは何人もいるのである。ハミ村で事件の様子を詳細に話してくれたコイは、母や兄弟を多数虐殺されたが、「ク・スジョン氏には感服する」と言う。コイは「虐殺事件のことは今でも鮮明に思い出し忘れることはもちろん

19) 当時南ベトナム政府統治下にあった地域では、南ベトナム解放民族戦線（米国側の蔑称ではベトコン）に入っていて被害を受けた人への補償のみが、現在行われている。一般民衆で米軍や韓国軍に虐殺にあった人々に対しては何の補償も救済策もない。

到底できないが、一方でク・スジョン氏がわれわれのために、勇敢に奮闘してくれている姿を見ることで韓国人をうらむ気持ちはなくなった」と筆者に語った。

VI 結 論

韓国軍が虐殺事件を多発させた地域において、韓国に対するイメージを塗り替え、ベトナム人の韓国に対する憎悪を薄め、親近感に変えて来たのは、まさにク・スジョンやナワウリの活動であった。韓国のNGOや個人など民間の地道な活動が、虐殺を生き延びたベトナムの人たちの心を解きほぐし、記憶を捻じ曲げたり誤魔化したり過去にフタをすることによってではなく、記憶を新たにすることで、赦しと和解が生まれていく過程を本稿では描いてきた。ベトナム研究者である筆者がこの問題を取り上げる目的は、「売国奴」とまでののしられたというク・スジョンたちの活動こそ、実は被害者であるベトナムの人々との真の和解を成し遂げることにつながっていることを、この問題に関して分裂したままの世論を抱える韓国社会に、第三者の立場から訴えたかったからである。「赦し」「和解」は、事実を覆い隠したり、誤魔化したりすること、また国家間の物質的援助の投入によってだけでは、決して成し遂げられないと、この韓国とベトナムとの間の事例を通じて、日本人として自戒をこめて思う。これが本稿の目的の一つであった。

結論では、二つ目の目的、被害国と加害国における戦争をめぐる公定記憶と、公定記憶にならない記憶の交錯や、国家体制と記憶の多様性の関係について論じたい。

ベトナム政府の「過去にフタをし、未来へ向かおう」という政策は、一見、過去を水に流す未来志向の美しい志に聞こえる。ベトナムは19世紀以降、まずフランス、そして日本²⁰⁾ 米国(韓国など)、中国と連続して独立のために戦ってきた。だから過去について掘り起こし、戦争責任の追及や補償を求め始めたらきりがなく、どの国家とも対立しなくなればならなくなり、それはベトナムの今後の発展のために決して得策ではないというのがベトナムの立場である。しかし、現代世界では「過ぎたことを水に流す」は、こと戦争に関する限りもはや美德ではなく、「平和のために〈過去〉を忘れない」ことこそが美德であり、価値観である[小菅2005:205]。加害国であるのに過去を必ずしも認めない勢力も強い日本とは異なって、ベトナムは被害国であるため、外部から非難されることはないが、時代の価値観に逆行している点では同じである。

20) 日本は、ベトナムを占領中、1944年末から1945年初頭にかけて北部で大飢饉を引き起こした。人数に異論はあるものの、ベトナムでは「200万人餓死事件」と呼ばれている。「過去にフタをする」というベトナム国家の方針をよいことに、日本政府はこの問題に関して何の対処もしていない。良心的な日本人の間でも「過去にアジアの人々に苦痛を与えた」という時、念頭にあるのはほぼ中国と韓国だけである。200万人餓死事件に関する書籍で日本で発行されているものは、写真家である早乙女勝元が、ベトナム人写真家が当時撮った写真を編集して発表したわずか1冊である[早乙女1993]。

そのため、ベトナム政府の方針は、虐殺を経験した地元だけでなく、ク・スジョンや『ハンギョレ21』の報道、NGOナワウリの活動など、韓国の民間による、暗い歴史を明るみに出し過去を教訓にして未来に生かそうとする動きとも微妙な齟齬を生じてきた。

それが典型的に現れたのが、ハミ村の慰霊碑をめぐる騒動である。虐殺事件当時ハミ村は、領域的には南ベトナム政権下にあったが、南ベトナム解放民族戦線と、米軍、南ベトナム政府軍・韓国軍との戦闘の最前線に位置していた。そして革命側にも南ベトナム政権側にも兵士を出していた。現在のベトナムには、革命に功労のあった者に対しては恩給があり、革命側に加わって戦いの過程で命を落とした者の家族に対しては援助政策がある。しかし、最前線だったハミ村の虐殺被害者たちは、老人、女性、子供たちばかりで、直接南ベトナム解放民族戦線に参加してゲリラ活動をしていた人々ではない。虐殺を生き延びた村人や遺族も、革命に功労があったとは言えないため、現在ほとんど何の手当ても得ていない。

このような「中途半端」な村の虐殺事件の記憶は、経済発展に邁進することこそが至上命題の現在のベトナム国家にとっては、暴いても何の得もない「歴史」に過ぎない。「輝かしい勝利」になんら貢献していない、生き残りの人たちが語る「ハミ村の虐殺」は、ベトナム国家の公定記憶になりえないのである。つまり韓国軍による虐殺の記憶は、ベトナムでは、ナショナリズムと結びついた記憶にはならない。この点が、日韓や日中の関係と最も異なるところであろう。

加えて、ベトナムは現在、「戦争の記憶」をナショナリズムの中核におこうとしていない。長期にわたった戦争に勝利をおさめたことは、ベトナム共産党の正当性の源泉ではあるが、共産党が人々の支持を集め続け、全土の統治を続けるためには、国民に物質的豊かさをもたらす経済発展の成功こそが必要になると考えている。特にベトナム戦争中、南ベトナム政権側にしていた人々も国民として多く抱える現在のベトナムにとって、「戦争の輝かしい勝利の記憶」は必ずしも100%の国民に、公定記憶として受け入れられるわけでもない。だからこそ、経済発展こそが国民を統合する最高の装置になると考える国家にとって、過去の加害者側の負の歴史をあげつらって外交関係を悪化させ、ひいては経済援助に影響が出るような事態を引き起こすことこそ絶対に避けなければならない。そのため、ベトナム国家は「過去にフタをする」というスローガンの下、「国家利益」を優先し、現政権への貢献がなかった戦争被害者の声を封殺することになった。

経済的には資本主義国家との違いを見出すのが難しい現在のベトナムだが、共産党一党支配のもとでやはり党の方針は絶対である。「過去にフタをする」という方針も、クアンナム省やハミ村の人々が結局党の指導に従うしかなかった例を見てもわかるように、上部組織だけでなく村々の末端まで浸透している。つまり、国家レベルに訴え出るとは許されず、公定記憶からもれる多様な記憶は、語り継がれない。ただし、国家との摩擦を起こさない限りは問題とはならない。例えば、省や県レベルでは、人民委員会（日本でいう県庁や市役所などの行政機関

にあたる)が、虐殺事件の慰霊祭を組織したり、独自に虐殺事件についての調査を行って被害者の名簿を作成したり、事件の概要をパンフレットとして編集しているところもある(ビンディン省、クアンナム省など)。省や県は被害の記憶を省レベル、あるいは県レベルにとどめるとともに、国家とは異なる独自の動きをとることで、住民たちの不満の緩衝材の役割を果たしていると言える。²¹⁾

しかしながら、国家レベルの公定記憶になりえない状況には変わらない。小菅は「ナショナリズムと強固に結びつかない悲惨な〈過去〉は、時の流れによって風化する。戦争世代の死は、〈過去〉をめぐる感情対立をとにかくも解消へと導いていくことになる」としている[小菅2005: 192]。虐殺を生き延びた人々の死とともに消えていくであろう記憶を、韓国のNGO関係者が、皮肉なことに、外部者として、別の回路で記述・記憶しつづけているとも言える。ベトナム戦争の記憶を語り次いで未来の平和に生かそうとする韓国NGOの活動こそが、国家に包摂されない戦争の多様な記憶を維持している。

韓国NGOはさらに自国において、ベトナム戦争に参戦した韓国軍の負の記憶を含めて、公定記憶にしようと努力している。しかし実際は、韓国軍の一部が引き起こした虐殺事件についての記憶は、いまだ韓国の公定記憶にはなっていない。そのため、公定記憶に反したハミ村の虐殺事件を記した碑文に横槍を入れ、修正・削除させようという動きが出てきたと言えるだろう。共産党一党独裁体制の下で、国家の公定記憶が不動のものであるベトナムでは、被害国であるにもかかわらず、韓国軍によって引き起こされた悲劇の記憶は国家レベルでは継承されないのに対し、市民運動が強い力をもつ韓国においては、大きな反発を受けながらも、「負の記憶」を引き受ける動きが続いている。

(文中敬称略)

参考文献

日本語

- 韓 洪九. 2005. 『韓洪九の韓国現代史Ⅱ——負の歴史から何を学ぶのか』高崎宗司(監訳). 東京: 平凡社.
 鄭 殷溶. 2008. 『ノグレンリ虐殺事件——君よ、我らの痛みがわかるか』伊藤政彦(訳). 札幌: 寿郎社.
 金 賢娥. 2009. 『戦争の記憶 記憶の戦争——韓国人のベトナム戦争』安田敏朗(訳). 東京: 三元社.
 金 榮鎬. 2005. 「韓国のベトナム戦争の『記憶』——加害の忘却・想起の変容とナショナリズム」『広島国際研究』11: 1-30.
 小菅信子. 2005. 『戦後和解——日本は〈過去〉から解放されるのか』東京: 中公新書.
 Ku Su Jeong. 2002. 「ベトナムの韓国軍」(特集1 記憶と歴史(3) シンポジウム 戦争の悲しみ・戦場の記憶 ハリウッドではないベトナム戦争)金成蘭(訳). 『Quadrante』4: 33-39.
 慶 淑顕. 2000. 「戦場・枯葉剤・虐殺・韓国・ベトナム——ベトナム戦争から帰還した三人の元韓国兵」

21) このように省や県のレベルが、必ずしも国家の方針に従わず、独自の動きを見せて、住民の不満を解消させたり、沈静化させたりすることは、この件にかかわらず非常に多く見られる。しかし独自の動きは、省や県レベルにとどまり、国家の方針を左右するわけではない。

- 『アジアの傷 アジアの癒し』アジアプレスインターナショナル（編），253-281 ページ所収。名古屋：風媒社。
- 中村梧郎。2005. 『新版 母は枯葉剤を浴びた——ダイオキシンの傷あと』東京：岩波現代文庫。
- 野田正彰。2001. 「ベトナム戦の罪責に向き合う韓国——元兵士3人の証言」『世界』686(4): 236-247.
- グエン・バン・ボン。1980. 『白い服——サイゴンの女子学生の物語』高野功（訳）。東京：新日本出版社。
- 朴 洪英。1998. 「韓国軍のベトナム派兵決定過程に関する一考察——冷戦構造のなかの実利外交 1961-1966」『年報地域文化研究』2: 151-172.
- 朴 根好。1993. 『韓国の経済発展とベトナム戦争』東京：御茶ノ水書房。
- 早乙女勝元。1993. 『ベトナム “200万人” 餓死の記録——1945年日本占領下で』東京：大月書店。

韓国語

- 이용준 [イ・ヨンジュン]. 2003. 『베트남, 잊혀진 전쟁의 상흔을 찾아서』[ベトナム, 忘れられた戦争の傷痕を探して]. 서울: 조선일보사.

ベトナム語・英語

- Ku Su Jeong. 2000. *Sự can dự của quân đội Hàn Quốc trong cuộc chiến tranh của Mỹ tại Việt Nam*. Luận án thạc sĩ sử học, Đại học quốc gia thành phố HCM.
- Huyện Điện Bàn. 1995. *Những vụ thảm sát dã man của Mỹ ngay và chư hầu trên đất Điện Bàn*. Ban điều tra hậu quả chiến tranh huyện Điện Bàn.
- Republic of Korea, Ministry of Public Information. n.d. *Korea and Vietnam*.

インタビュー対象者（氏名，生年，職／住所など，インタビュー日時）

- Đinh Văn Mạnh (1949). クアンナム省新聞記者会副主席（省都タムキー市），2009年2月25日，ハミ村出身。
- Đinh Văn Quyện (1957). デイエンバン県デイエンアン社祖国戦線副主席，2009年2月25日。
- Hà Phước Mỹ. デイエンバン県デイエンアン社人民委員会総務課長，2009年2月24日。
- Hoàng Châu Sinh (1944). クアンナム省祖国戦線主席（省都タムキー市），2009年2月23日，25日。
- Lê Thị Tuyết Mai (1979). デイエンバン県デイエンアン社青年団書記，2009年2月24日。
- Nguyễn Chua (1935). デイエンバン県デイエンアン社在住，2009年2月25日。
- Nguyễn Cội (1945). デイエンバン県デイエンズオン社ハミ村在住，2009年2月26日。
- Nguyễn Hữu Đồng (1973). クアンナム省新聞記者（省都タムキー市），2009年2月25日。
- Nguyễn Lập (1952). デイエンバン県デイエンズオン社ハミ村在住，2008年2月25日。
- Nguyễn Minh Hùng (1952). クアンナム省デイエンバン県副主席，2009年2月23日，ハミ村出身。
- Nguyễn Ngọc Duyên (1964). デイエンバン県デイエンズオン社副主席，2009年2月24日。
- Nguyễn Xu (1929). デイエンバン県デイエンアン社在住，2009年2月25日。
- Phan Mậu (1928). デイエンバン県デイエンアン社在住，2009年2月25日。
- Phạm Thị Hoa (1927). デイエンバン県デイエンズオン社ハミ村在住，2008年2月25日。
- Trần Thị Đước (1926). デイエンバン県デイエンアン社当時フォンニ村在住，2009年2月24日。
- Trần Thông (1964). デイエンバン県デイエンアン社人民委員会，制度政策烈士傷病兵家庭担当，2009年2月24日。
- Trịnh Tây (1923). デイエンバン県デイエンアン社当時フォンニ村在住，2009年2月24日。
- Trịnh Thiên Chiến (1963). デイエンバン県デイエンアン社当時フォンニ村在住，2009年2月24日。
- Vô Văn Năng. デイエンバン県デイエンアン社党委員会書記，2009年2月25日。